

**主 題：信仰者と罪：一つのからだとして生きる教会**

**聖書箇所：コリント人への手紙第一 12章12-27節**

**テーマ：教会（キリストのからだ）における兄弟姉妹との関係を改めて考え直すこと**

さて、今朝皆さんと学んでいきたいのはIコリント12：12-27です。ここ数回、私たちは信仰者と罪：壊れた関係を修復することに関して、八つの要素をパウロのことばから考えてきました。これまでに学んできたもの、それぞれ覚えているでしょうか？一つ目に見たのは、慰めを与えてくださる神様の存在でした。二つ目に見たのは準備されていた恵みの態度でした。そして、先週三つ目に見たのは愛を伴う罪への戒めでした。もちろん、まだすべてが終わったわけではないので、来週はIIコリントに戻って四つ目の要素を考えていければと思っています。

少し脱線して、きょう皆さんと考えたいことは、タイトルにもあるように、一つのからだとして生きている教会についてです。そのことを考える上で、まず自分のこととして少し考えてみてください。もし「あなたにとって、教会とはどのようなものですか」、「あなたにとって神の家族、兄弟姉妹との関係はどのようなものですか」とだれかから尋ねられたら、皆さんはどのように答えるでしょうか？先週、私たちが愛を伴う戒めについて考えていた中で、私は皆さんにこんなことを言いました。キリストによって罪赦され、贖われた私たちはもはや自分のために生きているではありません。私たちはみな同じキリストのからだの一部であって、だれかが罪によって苦しめば同じように苦しむのです。だからこそ、私たちは同じ神の家族として罪のもたらす影響が深刻なものであるとわかっているからこそ、互いの罪に正しく向き合うことが必要なのです。でも実際はどうでしょう？前回も一部だけ見ましたけれども、かつてパウロはこんなことばを残していました。きょう、私たちが学ぶIコリント12：26-27に「:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」とあります。みことばは、恵みによって救われた私たちがキリストのからだとして生かされているというすばらしい真理を教えてくれていたのですけれども、果して私たち自身はそれにふさわしい考え方や歩みをしているのでしょうか？同じキリストのからだに属する兄弟姉妹とともに苦しみ、ともに喜びながら生きていくということは、それぞれにとってどれほど欠かせないものだと考えているでしょうか？兄弟姉妹とともに生きていく、そんな関係は、あってもなくても自分にとっては何ら変わりのないものだと考えているのでしょうか？

**○忘れてはならない教会の三つの姿：**

きょう私たちがしたいことは、改めて教会、神の家族というものがどのようなものかを聖書から正しく考え直してみることです。これまでももう何度も見てきましたけれども、きょうは特に私たちが決して忘れてはならない教会の三つの姿について、パウロのことばから見ていきたいと思えます。そして、そのことを通してキリストによって、今、私たちはどのような者へと既に変えられているのか、ともに信仰生活を送っていく兄弟姉妹との関係がどれほど自分にとってすばらしくて、どれほど欠かせないものなのかをいま一度考えてみてください。願わくは壊れた関係を修復することを追い求めることにおいても、私たちが兄弟姉妹との関係がどれほど大切なのかということを知っているからこそ、覚えているからこそ、ますますそれを望む者へと成長する、きょうの時間がそんな助けと励ましになればと思います。そしてもし、まだイエス・キリストを自分の救い主として受け入れておられない方、教会とは何なのかよくわからない方がおられるのであれば、是非みことばが教えていることをともに考えてみ

ましよう。キリストが何を成し遂げられたのかを知り、きょう自分のこととして、救いを信じ受け入れることができる、そんな機会となることを心から祈っています。

では早速ですけれども、みことばを見て行きましょう。いつものように、まずみことばを読みますので、Iコリント12：12-27を見てください。

### Iコリント12：12-27

「:12 ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。:13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。:14 確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。:15 たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。:16 たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。:17 もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょうか。:18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。:19 もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょうか。:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うこともできません。:22 それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえてなくてはならないものなのです。:23 また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになります。:24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。:25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」

#### 1. 教会とはキリストと一つとされたもの 12-13節

さて、私たちが忘れてはならない教会の姿として、まず一つ目に挙げられるものは、教会とはキリストと一つとされたものだということです。救われた者はみな既にキリストのからだに属する一つのものとしてとされているのです。12節は「ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように」と始まっていました。ここでパウロは人のからだを例えに用いて、だれにとっても明白な事実を教えようとしていました。彼はまず兄弟姉妹の皆さん、私たちの肉体は一つです、でも、その一つのからだは多くの部分からなり立っていますと言うのです。それはそのとおりですよ？もちろん私たちのからだはひとり一つしかありません。そして、そんな私たちのからだは、頭や腕、腰や足といった外側から見える部分だけでなく、肺や心臓といったさまざまな内側の器官からも成り立っているのです。そうやってそれら一つ一つの部分が適切に結びついて働いて初めて、私たちのからだは一つのものとして機能するのです。

逆を言えば、もし手や足を切り落としてしまえば、当然、その切り落とされた部分は死んでしまうのです。ですから、私たちのからだというのは、全体で一つのものであって、それに属するすべての部分がしっかりとからだに結びついていなければ、その部分は生きてはいけません。これは言うまでもなく、だれにとっても明らかな事実だと思います。そしてそんな明白な事実を、パウロはここでより重要な真理と結びつけて、12節の最後で「キリストもそれと同様です」と言うのです。ここで少し思い返してみてください。パウロは自分自身の手紙の中で、キリストと教会との関係に関して、特にキリスト

がかしらであり、教会がそのからだであるという描写を繰り返し描いていました。例えばエペソ 1 : 22-23 を見ると、「:22 また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。:23 教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」と。コロサイ 1 : 18 にも簡潔に「また、御子はそのからだである教会のかしらです。」と書いていました。キリストは教会のかしらであって、教会はそのからだなのだ。要するにパウロがここで、「キリストもそれと同様です」と口にした時、彼が言わんとしたことは明白でした。それは私たちのからだが一つであるのと同じように、キリストとそのからだである教会は切り離せない関係にある。もっと言えば恵みによって救われた私たちはみんな、かしらであるキリストのからだの一つとされた者として今を生かされているということです。だれでも自分の罪を認めて、キリストの福音を信じ、受け入れた者は、どの時代の人であろうと、世界中どんな場所にあっても、人種やことば、文化や年齢、性別に関係なく、御霊によって新しくされ、キリストと結びついたものとして、今を歩んでいると言うのです。

そのことに関して、続く 13 節でも「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」とはっきりとつけ加えていました。ここに「一つの御霊によってバプテスマを受け」とありました。御霊のバプテスマについては、いろいろなことが言えますけれども、ここで簡潔に言うのであれば、私たちはみんな聖霊なる神様がうちに働いてくださったことによって、救いへと導かれ、キリストのからだに属する者へとされたのだということです。聖霊が働いてくださったからこそ、私たちはキリストのからだに属する者になりました。生まれながらに自分の罪過と罪の中に死に、だれひとりとして神様を求めようとしなかった私たちは、創造主なる神様に逆らって、その罪ゆえに滅びへと真っ直ぐに突き進んでいました。頑なな心で神様を認めようともせず、ただ自分の肉と心の欲の望むままを行って歩んでいたすべてのものは、生まれながらに御怒りを受けるべき、さばかれて当然の存在だったのです。私たちは罪の中に死んでいたからこそ、私たちが何かをすることはできませんでした。私たちには希望がなかったのです。しかし、そんな罪の中に死んでいた私たちのうちに、聖霊なる神様が恵みによって働いてくださり、自分がいかに聖い神様の前に愚かな存在なのか、どれほど救いを必要とする存在なのかということを私たちは知ったのです。

そしてそのことに気づかされた私たちは、これまでの生き方を悔い改めて、主イエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れ、新しい歩みを始めることができる者へと導かれたのです。私たちには何もできませんでした。神の国に入ることなど到底できなかつた。そんな私たちを新しく生まれ変わらせてくださったのは、もちろん私たちの正しい行いでは到底ありませんでした。私たちが救いへと導かれたのは、ただ、三位一体なるまことの神様のあわれみ深い働きだったのです。テトス 3 : 5-6 でも「:5 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。:6 神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。」と述べられていました。こうして私たちはキリストによって、聖霊なる神様の働きを通して救われ、同じ一つのからだに属する者へと変えられました。ここにはもちろんユダヤ人やギリシヤ人といった国籍や民族の違いも関係なければ、奴隷や自由人といった社会的な立場も関係ありませんでした。もちろん金銭的な面における違いも、学歴における違いも関係ありませんでした。私たちがキリストのからだに属することができるようになったのは、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ 14 : 6)と言われた方をただ信じる信仰を通してだったのです。確かに私たちのうちにはいろいろな違いがあります。しかし、救われた者はみんな同じ一つの御霊を受け、同じ一つの主によって救われ、一つのキリストのからだに属する者と召されたので

す。私たちがイエス・キリストを愛しているのであれば、私たちはこの方であって一つだということです。

ガラテヤ3：26-28にも「:26 あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子でもあります。:27 バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。:28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」と記されていました。私たちが一つとされたその根拠はイエス・キリストでした。同じ御霊を受けたから、私たちは一つとされたのです。だとすれば少し考えてみてください。救われた者の土台がみんな同じイエス・キリストに対する信仰なのであれば、どうしてそこに分裂が生じるのでしょうか？振り返ってみれば、これこそコリントの教会が抱えていた問題でした。Iコリント1：10からこんなことばが記されていました。「:10 さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みなが一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。……:12 あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」「私はキリストにつく」と言っているということです。:13 キリストが分割されたのですか。あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。あなたがたがバプテスマを受けたのはパウロの名によるのでしょうか。」と。パウロはコリントの兄弟たちの間で、ある人たちが私はパウロにつきま、ある人たちが私はアポロにつきま、ある人たちは私はキリストにつきまと言っていて、分裂が生じていることに驚きを隠せませんでした。自分たちの好みや考えによって、彼らは自分たちの望むリーダーに従い、その結果そこに争いや対立が生まれていたのです。彼らは間違いなく自分たちはキリストにあって一つとされているということを忘れていました。だからこそパウロは「キリストが分割されたのですか」と言うのです。あなたたちはイエス・キリスト、ただそれによってのみ、同じ一つのからだに属する者になったのに、なぜほかのものでそれを壊そうとするのですかと。

これは今の私たちにとってもとても大切なことになります。私たちが忘れてはならないことは、教会というのは単なる人々の集まりではなく、同じ御霊によって、同じキリストによって、一つのからだとされた者の集まりだということです。もっと言うならば、私たちを同じ神の家族として結びつけているものは、十字架によって罪を贖ってくださったキリストだということです。兄弟姉妹との間には当然いろいろな違いがあります。しかし、キリストによって、同じように救われた者はみんなこの方にある一致を持っているのです。だからもし私たちがいろいろな違いで争いを生じさせるようなことがあるのであれば、自分自身にまず問いかけるべきことは、今、相手に対して抱えている自分の思いや考えは、同じキリストのからだに属する者として一致を保っていくべき者としてふさわしいものなのかということです。私たちを一つとしたキリストに心をとめるのか、それともそういったさまざまな違いに心をとめるのか——。覚えることです。たとえどんな違いがあろうとも、私たちは神様によってもう既に同じ一つのからだに属する者として変えられたのです。私たちはみんなキリストと一つとされた者なのだということが忘れてはならない一つ目の教会の姿でした。

## 2. 教会とはさまざまな人がキリストと一つとされたもの 14-20節

さて、続けて二つ目に忘れてはならない教会の姿は、教会とはさまざまな人がキリストと一つとされたものだということです。今、私たちは救われた者がみんなキリストにあって一つとされているということを見たのですが、何回も言うように、そこには個性や性格、いろいろな違いが全く存在しないということではありません。一つのからだを構成する者たちには、そこに当然さまざまな違いが存在しているのです。パウロは続けて14節から「:14 確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。:15 たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。:16 たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。:17 もし、からだ全体が目であった

ら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであつたら、どこでかぐのでしょうか。:18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。:19 もし、全部がただ一つの器官であつたら、からだはいったいどこにあるのでしょうか。:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。」と教えていました。最初の12-13節のところ、教会が一つとされたものだと強調していたパウロは、今度はその一つのからだにおいて、多様性があるということ、違いがある、さまざまな異なった点があるということを説明として加えていました。一つのからだを構成するそれぞれの部分には、さまざまな違いが存在するというのです。

でもこれもある意味当たり前のことだと思いませんか？想像したくないかもしれませんが、一度思い浮かべてみてください。もし私たちのからだのすべてが目できていたとしたらどうでしょう？見たくないものが見えるだけではなく、そもそもそれはもうカラダとは呼べなくなってしまいます。私たちにあって当然目というものはなくてはならない大切なものですが、でも目しかなければ、からだはからだとしての正しい機能を果たすことはできないのです。私たちのからだには必要な分だけのいろいろな器官が与えられ、それらが適切に組み合わさり、働き合うことで、私たちのからだはからだとして成り立っているのです。それぞれの器官には違いがあつて、その違いが一つのからだを構成するのに欠かせない重要な要素となるのです。だとすれば、ここでパウロが例を挙げて言わんとしていた意図がよくわかりませんか？たとえ足や耳が、私は手や目ではないから、からだに属さないと云つたところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。言いかえれば、それぞれに重要な役割がある器官が、からだの中のほかの器官と比べて、どうして自分はあの器官ではないのだろうか、不平不満を口にしているのであれば、それははなはだおかしなことですよ。

そしてこの原理は、私たちの実際のからだに当てはまるだけでなく、同じキリストのからだである教会にももちろん当てはまるのです。いま一度18節を見ると、「しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。」と非常に重要なことが書かれていました。ポイントは、神様ご自身が御心のままにキリストのからだに入れられたすべての者に、それぞれ重要な役割を与えられているということです。ほかのだれでもない、神様がみこころに従って、からだの中にそれぞれの異なる器官を備えられているのだということです。すばらしいと思いませんか？よく考えてみてください、神様は私たちがそれぞれ教会の中で、ほかの部分とは異なる大切な働きを担うように、その働きをあらかじめ備えてくださっているということです。私たちに霊的賜物が与えられているのもまさにそのためです。今、私たちが学んでいる文脈を考えてみても、パウロは12:4-7で「:4 さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。:5 奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。:6 働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。:7 しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」と記していました。それぞれに御霊の賜物が与えられているのは、自分の益のためではなく、「みな益となるため」でした。神様は例外なくご自身の子どもたちひとりひとりに、キリストのからだにおいてほかの兄弟姉妹の益となるために賜物を与えられておられるのです。教会の中において、私たちはみんな神様からそれぞれ役割が与えられていると言うのです。

だとすれば、少なくとも二つのことをよく考えなければいけません。一つ目は、私やあなたはそれぞれ特別な役割を教会で担っているということです。私も、皆さんひとりひとりに、それぞれに神様から与えられた特別な役割を教会で担っているということです。みことばは、主によって私たちひとりひとりに賜物が与えられていると教えてくれました。ある人はその賜物が一つだけかもしれませんが、ある人は複数の賜物を持っているのかもしれませんが。またある人の賜物はだれにもわかりやすいものかもしれませんが、ある人の賜物はなかなかほかの人に気づかれぬようなものかもしれません。たとえ自分が今どのような賜物を持っているのかがわからなかったとしても、確実に言えるのは、救われ

ているすべての者は、主から少なくとも一つ以上の賜物を受けているということです。だからこそ、私たちはみんな神様から与えられた賜物を用いて、教会の中で貢献していくことができるのです。皆さんひとりひとりには、皆さんにしかできないその方法をもって、神様の栄光を現していくことができるのです。だからこそ自分は賜物を持っていないから、教会の役に立つことはできませんとか、自分はあの人のようにすぐれていないから、教会において私の役割はありませんとか、そんなことを言える人はだれひとりとしていないということです。私たちはみんなほかの人にはできない特別な方法で、神様から与えられた役割を、教会の成長を目指して関わっていくことができます。神様はキリストのからだの中において、いろいろな働きが必要だからこそ、ご自身のみこころに沿って、それぞれに役割を与えられたのです。

ペテロも I ペテロ 4 : 10 - 11 で「:10 それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。:11 語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。」と述べていました。私たちは同じ主にあって、一つのからだに召されました。そして、それぞれに特別な役割が与えられているのです。だからこそ、私たちは与えられた賜物を働かせて、すべてのことにおいて神様があがめられるために仕え合っていくことが大切になるのです。信仰者であれば、ひとりひとりその責任を負っているということです。

でも、同時に二つ目に考えるべきことは、周りの兄弟姉妹も特別な役割を教会で担っているということです。私たち自身にそれぞれ役割が与えられているのと同じように、周りにいる兄弟姉妹にも神様から賜物が与えられ、自分とは異なる、彼らにしかできない形で教会の益のために働きをすることができるのです。だからこそ、私たちがほかの兄弟姉妹を覚える時に、それがどのような人物であったとしても、だれひとりとして自分には必要ないと言うことはできません。少し考えてみれば、必要ないと絶対に言えませんよね？なぜならその人は自分の持っている賜物を持っているのです。自分とは違う人に対して、あなたは要りませんと言えます？後で詳しく見ていきますが、パウロは 21 節にこのように書いていました。「そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うこともできません。」と。私たちの肉体で考えれば、それはそうでしょう。

でも、教会において皆さんの中でこのようなことを考えることがあるかもしれません。だれかの助けがなくても自分ですべてできるから、ほかの兄弟姉妹の助けなど必要ありません、ほかの人に邪魔されるのだったら、争いがそこに生まれるのだったら、そんなことが起こるのだったら、自分ひとりで大丈夫ですと。こうしてある人は信仰生活を自分ひとりのものであるかのように考えたり、もしくは気の合う人とだけは時間をともにして、そうでない人と時間をともにすることをあえて避けているかもしれません。でも、もしそのように考えているのであれば、それはみことばが教えているキリストのからだに召された者の生き方ではないということです。同じキリストのからだの器官として、同じ主によって私たちは自分たちだけでなく、ほかの兄弟姉妹にも必要な賜物がそれぞれ与えられています。だからこそ、だれひとりとして自分だけで生きていくことはできないのです。それは私を含めた教会のリーダーも例外ではありません。リーダーも皆さんの助けが必要です。皆さんもお互いの助けが必要です。キリストのからだにおいては、互いが互いを必要とするものとして召されたのです。私たちは神の家族として互いに足りない部分を補い合うことを通して、キリストのからだをともに建て上げていくのです。教会というのはさまざまな人がキリストと一つとされたもの、これが二つ目に忘れてはならない教会の姿でした。

### 3. 教会とはキリストと一つにされたさまざまな人が互いにいたわり合うもの 21 - 27 節

そして最後三つ目に、私たちが忘れてはならない教会の姿は、教会とはキリストと一つにされたさまざまな人が互いにいたわり合うものだということです。教会というのは、単にキリストと一つにされただけではありません。単にさまざまな人が一つとされただけではありません。互いにいたわり合うという一つの目的のために、私たちは一つとされているのです。もう一度21-24節を見ると、パウロは「:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うこともできません。:22 それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。:23 また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになります。:24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。」と書いていました。繰り返しになりますが、パウロはこの部分でもキリストのからだにおいて、それぞれの器官が欠かせないのだということを強く訴えていました。からだ全体が正しく働いて成長していくためには、一つ一つの部分が適切に組み合わせられ、働いていくことが求められていたのです。

でも時に、私たちはこんな誤った考えに陥ってしまうこともあるかもしれません。「私には教会の中で大した働きなんてできません。あの人のようにだれの目にもすぐれたことなんて、私にはできないんです。だから私なんかは何もしなくたって、別に何の影響もないでしょう。」、そういうふうに考えたり、いやいや一生懸命してもだれの目にもとまらないのであれば、自分は別に何もなくていいでしょう。そのような間違った謙遜を抱いたり、ほかの人の目を気にする間違ったプライドを私たちは覚えるかもしれません。でも、そのような思いを生じることがあるのであれば、みことばに記されていることをよく思い出してください。私たちが考えるように、神様はごらんになってはおられないからです。22節や24節に「:22 それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。」、「劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。」と書いていました。この中でいろいろなことが言われています。でもはっきりと言われていたことは、比較的弱いと見られる器官がかえってからだにとってはなくてはならないものなのだ。でもまさにそのとおりだと思いませんか？私たち自身のからだを考えてみても、私たちの目に普段とまらないような、時に気づきもしないような内側の部分が、からだにとっては非常に大きな影響をもたらすことがあります。だからこそ目立たない、一見大した働きをしないように思えるものであったとしても、私たちのからだはどの部分をとっても、この部分は要りませんと言える部分の一つとしてないのです。

私たちのからだにおいて、私たちのからだのすべての部分が必要なように、教会においても、たとえ目に見える働きであろうと、目には見えないところでなされる働きであろうと、信仰者ひとりひとりの主に対する忠実な働きというのは、教会の成長にとっては欠かせないものだと言うのです。キリストのからだの成長にはすべての器官が働いていくことが絶対に必要なのだと、パウロは別の箇所でも教えていました。例えば、エペソ4:16には「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わせられ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」と書いていました。からだ全体は一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力によって成長していくのだと。だから皆さんひとりひとりの働きは重要だということです。それぞれに役割が与えられていて、その役割に対してともに忠実に仕えていくことは欠かせないものだということです。そして何よりも、たとえほかのもの比べて劣っているように思えるものであろうとも、ほかのだれでもない神様はからだを調和させるために、それを必要なものとして尊んでくださると言うのです。「しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。」と書いていましたよね？全部が全部目では困るのです。全部が全部手では困るのです。それぞれに必要なものを、たとえ人の目には弱く見えるようなものであったとしても、それもすべ

て神様が必要なものとしてからだに与えたものでした。強い部分も弱い部分も含めて教会のあらゆる部分が一つのからだとしてますます成長していくようにと、神様は働かれるのです。互いが互いを必要として、ますます密接に結びついていくように、神様はからだを整えられるのです。それが神様の働きでした。

では、そこにどんな目的があると思います？そのことに関して25節でパウロは「それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。」と述べていました。神様がそのように働かれる目的はキリストのからだの中に分裂がなくて、堅く結びついた私たちがみんな互いをいたわり合うためでした。ここで特に「いたわり合う」と訳されていることばに注目してみると、これには「世話をする」とか、「相手の必要に注意を払う」、「心配する」といった意味が含まれています。つまり、これは私たちが互いの間に生じる必要に対して注意を払ってあげて、それを満たしてあげるという意味を含んでいるのです。これと同じことばがピリピ2章にも用いられています。この「いたわり合う」というのがどういうものなのかを考える上ですごく大切になるのでピリピ2：19-22を見てみると、パウロは獄中からピリピの兄弟たちにこう送るのです。「:19 しかし、私もあなたがたのことを知って励ましを受けたいので、早くテモテをあなたがたのところに送りたいと、主イエスにあつて望んでいます。:20 テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもないからです。:21 だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。:22 しかし、テモテのりっぱな働きぶりは、あなたがたの知っているところです。子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕して来ました。」、パウロはここでピリピの教会の人々に対して、テモテが真実にあなた方のことを心配しているのだと口にしていました。この「心配している」ということばがコリントで用いられていたものと同じものです。この箇所には描かれているテモテの姿を考えれば、この「いたわり合う」ということばが何を意味しているのかがより想像できます。テモテはピリピの兄弟姉妹のことを、また何よりもキリストのために働くことを心にとめていた人物でした。21節に記されていたように、周りの人たちはだれもみな自分自身の願いや自分の利益だけを求めていたのです。キリストのことを求める者などひとりとしていませんでした。しかし、そんな中であつて、彼は自分自身を犠牲にして、キリストのために、そして何よりも愛する兄弟姉妹の必要を満たすことを最優先にして、そのことに関心を払っていたのです。ほかの人たちは自分のことに関心があつたけれども、テモテはキリストとほかの愛する兄弟姉妹に関心を払い、彼らの必要を満たすことを考えていたのです。つまり、私たちがこのいたわり合うということばを考える時に一言えることは、単に自分の都合の良い時だけ、だれかの必要を満たしてあげるのではなくて、自分のことを横に置いて、ほかの人の必要を満たそうと進んで犠牲を払うということです。テモテは自分のことを横に置いて、彼はキリストのために、そして兄弟姉妹のために仕えようとしていました。

だとすれば、私たちはどうでしょうか？果たして私たちは自分を犠牲にして、ほかの兄弟姉妹に仕えようとしているのでしょうか？ほかの兄弟姉妹の必要を満たそうと、いつも歩んでいるのでしょうか？互いにいたわり合うということばをどれだけ熱心に求めているのでしょうか？このいたわり合うということばを私たちみな実践し始めたらどうなると思います？少し想像してみてください。私たちが自分のことを横に置いてキリストのことを考えて、ほかの兄弟姉妹の必要を満たすために自分を犠牲にして働き始めたら、仕え始めたら、その教会はどのようにになっていくと思います？私たちがみんな自分のことは置いておいて、ほかの兄弟姉妹に喜んで仕え始めたら、その教会はますます一つのものとして堅く結びついていくのです。そしてそのようにして、からだの器官がより深く結びついていく結果として、あることがそのからだの中に起こるようになっていくのです。Iコリントの続きの26節に「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」と記されていました。なぜ一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しむのでしょうか？なぜ一つの部



分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのでしょうか？それは深く結びついているからこそ、一つのものとして生きているからこそ、そのからだに属する者はみんな、だれかが受けたその痛みを、だれかが受けたその悲しみを、だれかが受けたその喜びを、だれかの感謝をともに味わう者となっていきます。ここでパウロはある人が苦しめば、ほかの部分はそれを見て見ぬふりをするとは言っていませんでした。ある人が尊ばれば、ほかの部分がそれを妬む、そんなことも言っていませんでした。私たちはともに苦しんで、ともに喜ぶのだと言うのです。なぜか——。それは私たちがほかの兄弟姉妹と一つのものとしてされているからだということです。

きょうパウロが繰り返し言っていることですけれども、みことばはひとりで信仰生活をしていくことも、自分の気の合う人とだけしていくということも教えていないということです。私たちは救われた時に、同じ主を愛する神の家族に加えられました。同じように救われた者たちは、ともに一つのキリストのからだに属する者として召されたのです。だからこそ、私たちはそのからだに属する一つの器官として、ほかの兄弟姉妹とともに働いていく必要があります。だれひとりとしてほかの器官から自分を切り離して生きていくことは絶対にできないのです。私たちにはそれぞれ神様から特別な役割が与えられました。皆さんにしかできない方法で、神様の栄光を現していくことができるのです。そして、私たちはお互いが必要です。私やあなたにはほかの兄弟姉妹が必要不可欠だということです。私たちがキリストに似た者へと成長していくためにも、私たちが自分では気づいていない過ちを教え合うためにも、私たちが落ち込んで悲しんでいる時に励まし合うためにも、私たちが罪によって正しい道からそれている時に、真理に引き戻すために戒め合うためにも、私たちはどんな場面においても互いが必要だというわけです。私たちのうちにはだれひとりとしてすべてにおいて完璧な者はいません。霊的賜物をすべて持っている者もいません。みなそれぞれに弱さを覚えて、みなそれぞれに欠けている部分があるのです。しかし、そんな弱さを私たちが持っていること、私たちのうちにそんな弱さがあることをご存じの神様が、私たちを一つのからだとして、互いにいたわり合っていくようにと召してくださったのです。私たちが欠けているのです。欠けている部分を補うために兄弟姉妹が与えられました。そしてその兄弟姉妹とともに神様の栄光を現すために教会において仕え合っていくことができるのです。これが、神様が持っておられた計画でした。だとすれば、私たちはどのように教会を、どのように兄弟姉妹との関係を見ているのでしょうか？最初にも聞きました。あなた自身にとって同じキリストのからだに属している者と、ともに苦しんでともに喜びながら生きていくということは、どれほど欠かせないものだと考えているのでしょうか？それともそのような関係はあってもなくても自分には何ら変わらないものだと考えているのでしょうか？

最後にパウロは27節で「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」と書いていました。これがパウロが伝えたかったメッセージでした。キリストによって御霊を通して救われた私たちひとりひとりが今、キリストのからだとして一つとされているということです。そしてそれと同時に、そのからだを構成する器官として、私たちはそれぞれに同じ主から大切な働きが与えられています。だれひとりとして必要のない存在はいません。ひとりひとりが教会を建て上げるのに欠かすことのできない役割を担っているのです。教会のうちのだれかだけが働けば、教会が成長していくのではありません。私たちみな働き始めれば、それによって教会は成長していくのです。私たちは互いが必要なのだとしたら、互いに進んでいたわり合って、重荷を分かち合いながら歩んでいきましょう。

## 〇まとめ

こんな私たちを罪から救い出してくださった偉大なキリスト、この方にあって一つとされた私たちが一致というあかしを持って、この世にあかしを立てていきましょう。成長しなければならない部分は私たちにたくさんあります。でも私たちは互いに愛を持って仕え合うことができます。互いに許し合って、仕え合っていくことができます。私たちが互いのことを祈ることができる。私たちが互いの罪を正

し合うことができ、私たちは互いを励まし合っていくことができます。私たちにはお互いが必要です。そしてその関係が私たちにとって大切だからこそ、関係が壊れた時に、みことばから正しく向き合っ  
て、その関係の修復を喜んで求め続けることが、私たちにとって大切なのです。それがきょう私たちが  
学ぶことができたことでした。それぞれが成長には欠かせません。ですから神様と兄弟姉妹との関係に  
おいて、ますますともに成長していきましょう。